



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	協働性を意識した学生の模擬授業づくり : 「教育技術論I」の授業から
Author(s)	梅津, 徹郎
Citation	北海道大学教職課程年報, 3, 25-30
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52588
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12514871_3_3.pdf



協働性を意識した学生の模擬授業づくり

－「教育技術論Ⅰ」の授業から－

梅津 徹郎

はじめに

本学の「教育技術論Ⅰ」の履修対象学年は3年生以上であり、履修登録学生・院生数は、2009年度171名、2010年度179名、2011年度143名、2012年度129名であった。また、登録学生・院生の所属はほぼ全学部・研究科に及んでいる。

さて私の授業では教材論、発問論を中心とした教科指導と学習指導に関する教育技術に加え、生活指導や学習集団づくりの技術など、教育実践全体を結びつける有機的な教育技術について話をしており、現場ですぐに役立つ知識・技術を教えるHow to講座ではない。

高校教師という仕事に焦点をあて、その喜びや困難さ、教師として必要とされる資質能力（教育観、子ども観、学問観、授業観、学習観など）のあり方など、教育技術を支えている人間観にせまる授業内容を心がけ、具体的な授業づくり（模擬授業）と実践的な討論、授業分析法の基礎等について授業をすすめている。

本稿では、学生グループによる「模擬授業」を通して、かれらが授業づくりにおける協働性をどのようにとらえたかを中心に紹介する。

多人数授業における模擬授業の意義

前述したように、教育技術論Ⅰの授業は100名を超える多人数授業であり、かつ全学部からの受講生である。このように文系、理系の学生が混在している多人数授業では特定の教科・科目を対象とした「各科教育法」とは違った授業構成を考えなければならない。

模擬授業では現代的課題を意識し、かつ教科の枠をこえた①平和教育、②労働・福祉、社会保障に関する教育、③環境教育、④防災教育など4つの分野を提示した。学生たちは自分が希望する分野に分かれ、さらにその分野内で8～10名のグループをつくることになる。当然のことながら、各グループには文系、理系の学生、院生が混在することになる。

私は模擬授業の意義を次のように説明している。

- 1) 教科の枠をこえたテーマでの授業づくりをとおして、授業づくりにおける共同性および協働性のあり方について考える契機にしてほしい。
- 2) 教材と発問を意識した模擬授業づくりから、生徒の認識形成のあり方について学ぶ契機にしてほしい。
- 3) 「たのしい授業」をつくることの難しさを経験し、それを教育実習に活かす契機にしてほしい。
- 4) 多人数授業でのパソコン操作、スライド構成など教育機器の有効的活用方法を考え

る契機にしてほしい。

2012年度の模擬授業グループは11グループとなり、その内訳は平和教育が2グループ、労働・福祉・社会保障が3グループ、環境教育が3グループ、防災教育が3グループであった。以下に模擬授業テーマの一部を紹介する。

平和教育：「在日米軍と日本」「領土問題」

労働・福祉・社会保障：「労働基準法とノマドワーカー・非正規雇用」「ワーキングプア」

環境教育：「生物多様性」「バーチャルウォーター」

防災教育：「原子力発電と持続可能性」「地震に備えよう」

模擬授業における「授業分析シート」の記入

各グループの模擬授業では、高校での50分授業を想定し、授業の“山”を始めに設定することで、効果的に生徒を授業に引き込むことができることを説明し、「導入部の15分」を工夫するよう指示をした。また多人数授業であるため、模擬授業ではスライドを作成し、マイクを使って行うよう指示した。

模擬授業が1つ終了した時点で10分ほど時間をとり、生徒役の学生全員に「導入部の15分」の授業について授業分析シートを記述式で書かせ、提出させている。

模擬授業→授業分析シート記入→模擬授業→授業分析シート記入→・・・

授業分析シートの評価項目として、①教材の工夫、②事実の意外性、③発問、指示の明確さ、④スライド提示の工夫、⑤生徒同士の発言交流、⑥たのしさーなどをA、B、Cの3段階で記入し、かつ教育内容、教材、発問等についてコメントを記述で書かせている。

この授業分析シートを記述することで、模擬授業への集中度も高まっている。

模擬授業の準備、実践から学生たちが学んだこと

同一学内とはいえ、学部が異なる学生同士があつまって授業づくりについて話し合いをもつということは一定の困難性があるが、各グループとも工夫を凝らして準備をすすめていた。今回は全グループの模擬授業が終了したのち、授業の準備でどのようなことを感じたかまた学んだかを感想アンケートとして記述してもらった。（提出者数126名）

その一部を以下に紹介する。（なお同一アルファベットは同一の学生・院生である。）

1. 模擬授業の準備で一番楽しかったことはどのようなことでしたか？

A：他学部の人と一つのテーマについて議論したこと。授業で扱うテーマについて自分たちで議論したが、そのような機会がなかなかないから。（文3・男）

B：議論で様々な意見や考え方が出ること、それに折り合いをつけていくことが楽しかったです。例えば、自分の取捨選択と他のひとの取捨選択は当然違うのですが、その中にも共通点を見出すことがおもしろかったと感じました。（文M1・女）

C：「働く」「労働」に関して、メンバーの多様な意見がぶつかり合う中で、自分の考

えが揺さぶられたり、新しい発見があったこと。(教4・女)

D：他学部の人たちとの意見交換が新鮮で、楽しかったです。(法3・女)

E：他の学部の人と何度も話し合いをしたことを通じて、他の人の考え方を知ることができ、新しい発見が多かった。また一方で、自分の考えとグループのメンバーの考えを合せながら試行錯誤することは時間や労力がかかったけれど、出来上がった時には喜びが大きかった。(理3・女)

F：違う学部の人たちと意見交流ができたこと。また、生徒がどんなことをしたら、どんな反応をしてくれるだろうかと、みんなで意見を出し合って考えていくのがおもしろかった。(理3・女)

G：教科の枠にとらわれずに一つのテーマに絞って、多くの人と話し合いをして、授業を考えていくのが楽しかった。(工4・男)

H：他学部の人たちと交流をしたり、考えを共有できたこと。普段は自分の学部の人としか関わる機会がないので。(農4・女)

I：大人数でああでもないこうでもないと話しながら、一つの方向を決めて進めていくというのは自分の周りでありなく、目新しく楽しかった。(薬3・男)

2. 他学部の人たちと協同・協働しておこなった授業づくりからどのようなことを学びましたか？

A：それぞれの専門性を生かすことで、生き生きとした授業づくりが可能になるということ。そのためにはディスカッションを重ねる必要があるということ。(文3・男)

B：他学部の人たちと協同・協働して行った授業づくりについて、授業をつくる過程が教職課程で学んだ「子どもが折り合いをつける」ということに、非常に似ていること。あくまで個人で感じたことではあるが、授業はやはり研究であること、研究手法は各自様々であること等を学んだ。また、意図というものは必ずしも伝わらないこと、伝えるための言葉、手法等を考えて折り合いをつけていった方がいいこともまなんだ。「妥協」と「折り合い」は違い、それによって子どもの思考の揺さぶり等も全然違うことも学んだ。(文M1・女)

C：専門が異なる人とお互いのできるところ、苦手なところを活かしたり、カバーし合って、より良い授業を創造していく過程、他者から学び合うことの大切さを体感した。(教4・女)

D：意見がぶつかり合って、最終的に自分が思っていなかった授業スタイルとなっても、すごく納得できました。(法3・女)

E：誰でも発言できる雰囲気にすることや、学部、学年に関係なくグループのメンバーが対等な立場であることが必要であるということ。(理3・女)

F：一つのテーマでも、学部が違えば、専攻や興味、考え方がまったく違うのでスライドをつくる時にいろいろな視点の案が聞けてよかった。また、そのような

感じ方の差があるのかとびっくりしたし、この経験で自分本位の考えになってはいけないということを学んだ。(理3・女)

G：他学部の人たちと協同して授業づくりをすることで、自分では考えつかないような意見やアプローチの仕方を知ることができて良かった。授業がより多様性のあるものになったと感じた。(工4・男)

H：一人一人のイメージや連想すること、意見が異なること。意見を出し合って話し合うことの大切さを学んだ。一人でつくるよりも内容に厚みが出た。(農4・女)

I：ある一つのテーマについて考えを述べるだけでも各個人の意見が異なっていたが、その中でも学部や専攻によって方向性に傾向があり、様々な見方を学ぶことができた。(薬3・男)

3. 各科教育法とはちがう模擬授業（教科の枠をこえた現代的課題・テーマ）は、あなたにとってどのような点で有益でしたか？

A：各教科は定められた内容をどう教えるかということに重きが置かれる。今回扱ったような横断分野的テーマでは、答えのない問題をどう教材化するかということが重要になってくるが、そのようなプロセスを学べたのが非常に有益だった。教材化とは、現実問題の絡まった糸を解きほぐし、単純な形にして各教科とむすびつけて提示することなのではないかと思った。(文3・男)

B：1と2で書いた点でも有益ですが、自主性がなければ、あるいは観念的なもののみでものごとを考えているだけでは授業にはなりえないということを新たに認識できた点でも有益だったと思います。(文M1・女)

C：理科や英語、社会など専門が異なるにもかかわらず、各自現代的課題に高い関心があり、それぞれの視点から問題を深め合っていくことができた点が有益であった。(教4・女)

D：社会科という枠での発表には参加したことがありますが、理系の授業には例示が多く、聞きやすい分、構造を練るのが大変そうだと思います。(法3・女)

E：実際に自分が教師であったとき、どのように授業をつくり上げていくのか、見つけなおす機会となった。また、自分の教師としての未熟さを感じることもできたので、積極的に教育実習などに取り組まなければならないと思うようになった。新しい視点を得られたので、これから生かしてみたいと思う。

時事的な問題について、教師の理解が深いこと、教師の考えを押しつけないことの大切さを感じた。(理3・女)

F：授業を行なうときに実際どのようなことに注意すべきなのか、またどのような発問が子どもの興味をひくのか、考えるきっかけになった。また、他のグループの発表をみて批評することで、どのような授業スタイル、板書、発問がすぐれていて、またどのようなものが思いのほかよくないのか、客観的に考えることがで

きた。(理3・女)

G：普段考えているような主要教科の教育とは違い、現代的な課題を扱っていたので正解というものがなく、授業をつくるうえで非常に難しかったように思う。特に自分たちの意見を生徒たちに押しつけず、一般的な知識を与え、様々な観点からそのテーマをみていけるようにうまく授業をしなければならないということ、あらためて実感させられた。(工4・男)

H：「高校生だとどう考えるだろう?」「高校生はこれでわかるかな?」と、高校生の立場から考えることが増えた。また、いろいろな人と共同する良さ、大変さを経験できた。(農4・女)

I：普段、答えの存在する問題についてばかり考えるようになっているので、答えのない問題について考えるのは、有益であった。また最近はニュースなどから情報を得なくなっていたので、このような問題について深く調べるのは久しぶりで、新鮮であった。(薬3・男)

おわりに

126 名分の感想アンケートのごく一部ではあるが、上記1～3の各記述内容から少なくとも以下のことが読み取れる。

- 1) 他学部の学生同士が互いの専門性(専門的研究分野)から学びあっている。
- 2) 意見の違いや問題意識の多様性に気づき、授業づくりでの協働性の意義と必要性を感じている。
- 3) 必ずしも“正解”のない課題を扱う際の授業構成法を考えあうようになっている。

特に価値判断をせまる問題の扱いの難しさを感じることができている。

これらを先述した「模擬授業の意義」に照らしてみると、第一の授業づくりにおける共同性、協働性の大切さについては多くの学生が記述しており、一定の成果がみられる。

また第二の発問を意識し、生徒の認識形成のあり方についてもグループ内でさかんに議論されており、第三の「たのしい授業」をつくることの難しさについても多くの学生が記述していた。

教職科目の多くが多人数授業であるが、教育技術論Ⅰでおこなった模擬授業づくりのよいうに“学生同士の交流”あるいは“協働性を必要とするグループ作業”を取り入れることは、多人数授業での授業方法改善にもなるであろう。

いずれにしても教職課程全体の改善の方途をさぐる取り組みは、今後も重要な課題であるといえる。

